

---

---

## ホットニュース(平成12年度／第32号)

---

---

### ●今月の業界ホットニュース／～中心市街地活性化の手懸かり～

先日、青梅に行く機会があったが、勉強不足のせいもあり駅前の商店街に入って一瞬吃驚した。ジャン・ギャバンやジャンヌ・モロー、映画黄金時代の邦画の看板が、店の看板の代わりに所狭しと掲げてあり、空き店舗では3、4枚も飾っているところもある。その数3,40枚はありそうである。昭和2,30年代に戻ったような懐かしい雰囲気である。

青梅市では吉川英治記念館が有名であるが、中心市街地からは離れており、観光客は通過するだけの市街地と思われるが、何とかその活性化を狙った試みの一つであろう。

サンシャインシティのナムコや新横浜のラーメン博物館のように、昭和レトロを再現できる程の街並みが残っているわけでもなく、また吉川英治に拘るわけでもなく、たまたま映画の看板屋さんが健在で、地域のちょっとした人材を活用した中心市街地活性化策といえよう。

これで商店街が活性化したか否かは聞いてないが、地域での手作りのアイデアという感じで、都市観光や中心市街地活性化の考え方の手懸かりの一つと思われる。

(代表取締役 堀田紘之)

---

---

### ●大気環境の改善を目指したロードプライシング課金額設定の考え方

---

---

自動車の通行量が限界的に1台増えるとき道路の混雑度が高くなりその効率性が低下する。この時、他の自動車通行者がどれだけの経済的損失を被ったかを推計し、全ての自動車通行者について集計した額が自動車が、限界的に1台だけ増えた時の道路混雑に伴う社会的費用である。(参考:自動車の社会的費用、宇沢弘文、1974)

限界的社会費用を利用料金として賦課することにより道路ストックを効率的に使用しようとするために、交通需要が価格弾力的であることを前提として、交通(一般化)費用に関する外部費用を内部化する制度がロードプライシングといえる。

外部費用には混雑費用、環境費用、インフラ費用、交通事故費用などが考えられるが、これらの外部費用はそれぞれ独立ではない。例えば小さな外部費用項目の相当額を内部化しようとしても、小さな外部費用項目の内部化が実現するかというそうではなく、最大の外部費用項目に対する内部化費用額の割合だけ全ての外部費用が削減されることになる。したがって最大の外部費用項目に着目して外部費用を計測することが重要である。環境外部費用は欧州での研究成果等からみると、貨幣評価値は小さい。混雑(渋滞)の外部費用の計測は現時点では困難であるが、環境、交通事故、インフラに係る外部費用よりも大きいとみられる。この意味から混雑費用について十分に検討する必要がある。

混雑費用の計測にあたり設定する必要があるのは、混雑費用を負担すべき主体(円滑走行時に効率的に資源配分が実現した場合の車種別交通量の構成)および自動車利用に関する時間評価値である。円滑走行時に効率的に資源配分が実現した場合の車種別交通量の構成の設定に際して環境改善の視点を導入することが、大気環境の改善を目指したロードプライシングの課金額設定には必要である。

(第四計画室室長 矢島充郎)

---

---

### ●下町にハロウィーン

---

---

もと駐車場に、L字型の行き止まり道路と、それに沿って9棟の3階建て戸建住宅を開発。都心の低未利用地を高度化した例といえば聞こえが良いが、最近の都心におけるミニ開発の典型的なパターンである。

都市計画上の問題はさておき、それが木造建築物の割合95%、建築物の密度100棟/ha、建築物の平均階高2階、公園の地区面積に占める割合0.3%という下町に出現したのだから、地域の関心事となった。屋上付き3階建てが寄り添うように9棟も建ち並ぶのは壮観である。

当然のことながら、この9世帯に1つのコミュニティが生まれた。L字型の私道が井戸端会議の場となり、そのうちバーベキュー大会が開催されるようになった。そうなると色々係りを決めることが課題になり、コミュニティの組織化みたいなものが自然にできてきた。

但し、このコミュニティはやや変形している。9世帯のなかに米国人の奥さんがいるためである。日常を異文化にリードされているようにコミュニティが進展している。

さる10月31日には、9世帯の子供たちが仮装のコスチュームで、近所の商店街を練り歩く疑似ハロウィーンを行った。商店街の人たちはもの珍しそうで、お菓子をくれた店は1店だけ。来年も行う予定でいるらしいが、この高齢化した下町がどれだけの異文化を受け入れられるか、来年の対決が楽しみである。  
(都市計画部長 高尾利文)

---

---

●NPO法人について

---

---

練馬区には、練馬まちづくりの会という非営利組織(NPO法人)がある。私は住民の立場として会の活動に携わっている。会のメンバーは一般住民、建築家、大学教員等で、主な活動は都市マスづくり支援、地区(石神井地区)のまちづくり活動等があげられる。最近、新聞にも掲載されたが、動くベンチ(名称CAT。太陽光発電で動くベンチ型ミニバス。車椅子利用者1人の乗車可能)を製作し、試乗会や商店街でのパレードを行った。

会では、現在は完全なボランティア活動であるが、今後NPO法人としてどのような事業を行っていくべきかの議論が続いている。石神井地区のまちづくり活動を開始するときにも、どのような立場でまちに入ればよいかの議論があった。立場は3つ考えられ、1つがファシリテーター(住民と行政の間のとりまとめ役)、2つ目はプランナー(まちづくりのプランを提案役)、3つ目がアドボケーター(故意に行政との反対案を提示し議論の活性化を図る役)である。結論は出ないまま活動を続けている。

NPO法人の事業性としては、主として行政からの委託業務が考えられる。行政からの委託を考えるとアドボケーターの立場は難しい。また、プランナーとしての技術力がある訳ではない。行政計画の住民参加等が増えている状況を見ると、地域限定型のNPO法人としてはファシリテーターが最も力を発揮できる立場であると考えられる。

今後、練馬まちづくりの会のようなNPO法人が根ざしていくためには、どのような社会的立場を獲得するかにかかっている。NPO法人のあり方を考えると共に、コンサルタントとしてプランナーの立場を奪われないように専門的資質を身につけ差別化を図っていきたい。

(第3計画室 内山征)

アルメックホットニュース(平成12年11月15日発行)

////////////////////